

# 3 寺子屋だ

※題字／森川芳聲



小倉北区勝山公園／母子像・しゃぼん玉 夕焼小焼 歌碑

歌碑のこころ

しゃぼん玉 野口雨情作詞 中山晋平作曲

しゃぼん玉<sup>だま</sup>とんだ 屋根<sup>やね</sup>までとんだ  
屋根<sup>やね</sup>までとんで こわれて消<sup>き</sup>えた

※詳しい解説は12頁に掲載しております

## もくじ

- 2 巻頭言 「日本」を学ぶ …………… 山口 秀範
- 3 新聞掲載記事(2件)の紹介
- 4 「偉人レポート」…………… 朝長 勇
- 6 昨今の教育事情雑感(最終回)…………… 坂口 秀俊
- 7 ミャンマーと日本(最終回)…………… 守田 剛
- 8 あれこれ思うこと④…………… 古川 忠
- 9 信長、秀吉とバテレンの戦い④…………… 廣木 寧
- 10 TERAKOYAふおとればーと
- 11 “あちこちde寺子屋”のご案内
- 12 歌碑のこころ(16) 編集余録 余録の余録



# 「日本」を学ぶ

代表世話役 山口秀範

## 現実に力を持たぬ古典

毎月学び続けているテキストを読了するのは感慨深いものです。「小柳先生に学ぶ会」で三年近くかけて、先生の遺著『日本のいのちに至る道』を読み終えました。最後に残しておいたのは、昭和二十九年に発表された「古典教育をはばむもの」、三十歳の若き国語教師として戦後を生きた先生の「文学」に対する述懐を記した一文でした。

そもそも「文学」は明治以降の翻訳語で、それ以前は「詩」と呼ばれていたと初めて知りました。詩イコール古典と言っても良く、それは「人生の波瀾をさながらに表現しようとする倫理的意思想そのもの」として祖先の精神の中に抜くべからざる位置を築き上げてきた」という重みを持っていました。

ところが近代以降特に戦後の古典文学は、懐古的感傷が優先する趣味の世界に閉じこもり、生徒が現実世界を生きる力になり得ていないと、自戒を込めて先生は綴られ、「現代に生きてゆく強烈な倫理感覚、乃至は政治感覚の錬磨という本質的な問題の追及なくしては、古典の真実の継承は永久に達成することは出来ない」と強い言葉で、教壇から警鐘を鳴らされたのです。

## 古典の読み方

別の会では早朝に吉田松陰の『講孟劄記』を四年半前から読み始め、ようやく学術文庫の上巻を終えようとしています。今月は『孟子（万章上五章）』に差しかり、『孟子』原文は次の通りでした。

「詩を説く者は、文を以て辞を害せず、辞を以て志を害せず、意を以て志を逆ふ。是、之を得たりと為す」

（凡そ古典を読む者は、個々の文字にとらわれて一句の意味を曲解してはならぬ。また一句の意味にとらわれて作者の真意を取り損なうことのないように。自分の心で真意を酌み取ってこそ本当に分かるというものだ）

ここの「詩」は『詩経』を指すようですが、古典全般とも読めます。小柳先生のご指摘で文学はかつて詩と称されていたことを知った翌週に、この文章に出会って不思議の感を覚えました。松陰はこの孟子の文を、読書全般の心得として受け止めます。

「凡そ読書の法は、吾が心を虚くし、胸中に一種の意見を構へず、吾が心を書の中へ推し入れて、書の道理如何と

見、其の意を迎へ来るべし」  
（あるべき読書法は、私心を捨て先入観を持たずに書物の中に分け入り、著者の真意を迎え取るように読むことだ）

それなのに、今の人は書物を自分の方へ引きつけて自己流に解釈するのみで、著者の心を酌み取ろうとしないと指摘するので。

孟子の説く、伝説の帝王舜の時代を題材にしながら、幕末当時の学問の有り方に切り込む、正に小柳先生の書かれた「倫理感覚・政治感覚の錬磨」を日常のものとしていた吉田松陰の真骨頂とも言うべき議論です。

## 日本の学問を継ぐのは

このように古典を学ぶ場は大変貴重です。DX（デジタルトランスフォーメーション）と呼ばれる変革に対応する新しい仕組みが求められる時代に、日本人のアイデンティティ（固有性）をしっかりと身につけることは益々重要になって来るとでしょう。特に若い世代や学生に、じっくり腰を据えて「日本」を学んでもらいたいものです。小中一貫校「志明館」は初等教育の段階からそれを実現する試みですが、最近ご縁を得た二つの取り組みをご紹介します。

### ①「日本道」

日本の文化・伝統を様々な観点から学ぶ機会を若者向けに提供し、「日本道検

定」を定着させようという運動です。毎朝五時半から講義と学び合いが始まりますが、その時間に数十名、多い時は百名もの学生や二十〜三十代がオンライン参加します。私も「お手伝い」で月に一回偉人伝を語りますが、画面を通した熱気に驚きます。

真面目な青年たちの意識が変わり始めているのかも知れません。今年の初詣に靖国神社へお参りすると、幾つもの若者グループが服装を整えて（女性の多くは着物で）参拝する姿に出会い、新鮮で頼もしい印象を受けました。「日本道」の活動はまだまだ荒削りながら、多くの若者の心に火をつける可能性を秘めています。

### ②自啓共創塾

「世界のための日本のこころセンター」に集う教育界、産業界、元官僚等の志ある面々が提供するオンライン塾で、十五〜五十歳の参加者を募集しています。こちらも学ぶ内容は多岐に亘りますが、キーワードは「日本型リベラルアーツ」。次世代リーダーたちの基盤に、日本人としての深い教養を持たせようとの願いから立ち上げられました。

寺子屋モデルの「偉人伝を語る」先生養成講座」への問い合わせも複数頂いています。第十五期を秋には開講予定、恐らくオンラインを導入した新しい形となるでしょう。今しばらくお待ち下さい。